

高専図書館利用上の諸問題¹⁾

田 健 一²⁾・進藤 俊 一

The Problems of the Utilization in Technical College Library

Kenichi Den, Shunichi Shindo

(昭和50年10月31日受理)

まえがき

科学・技術活動の今日的課題は、社会・経済の複雑化、流動化に適応すべく、その活動の計画化、システム化を推進するとともに、効果的な活動の展開が急務であり、また、科学・技術の適用による諸影響についての総合的、多面的把握及び評価が必要であって、市場経済の競争原理に倫理的に対処しつつ、人間の真の福祉の向上に貢献し得る科学・技術対策の策定が緊要であるとされる。(3)

このような観点から、高等専門学校の基本的教育目標である技術者教育とその教育課程を考察する場合、工学の特質の把握とそのための基礎教育のあり方が極めて重要な問題として提起されよう。特に、生涯教育の見透しのもとに、技術者としての人間性の涵養、「技術科学」教育を根幹とした創造性の開発と応用能力の究極的習得とを目標とする総合的、基礎的諸科目のあり方等を重視し、これらを検討し直す必要があろう。また、学校教育における読書指導及びその図書館活動の果す役割については、多言を要しないところであるが、殊に、その読書指導は、高専教育においても包括的読書活動とその発達体系に基礎を置き、教科の目標としてではなく、学習の過程として指導すべきであり、究極において、技術者としての人格の調和的発達の実現をめざして、教育活動の全般と密接な連繫を保ちつつ、計画的に実施すべきであって、このためには、教育課程及び諸ガイダンスとの関連をつねに考慮せねばならぬことは言うまでもない。

前述の視点から、高専教育における読書指導、図書館活動のあり方について考える場合、その教育活動の占める重要性は極めて大きいと言わねばならぬが、いま、現時点における高専教育を、主として、その図書館利用との関連からみるならば、そこに、多くの問題、例えば、

(1) 現在の学習・教授に占める図書館利用の程度、その限界と教育効果の問題

(2) 授業内容、方法上の問題と教育課程の所謂「過密」の問題

(3) 学生の自主的学習意欲の喚起、「動機づけ」の問題

(4) 座学と実験、実習学習における視聴覚教材、機器の利用及びその教育効果、さらに教育工学上の問題

(5) 指定図書、選定図書利用上の問題

(6) 既設々備の機能的活用

(7) 図書館の管理、運営予算と人的問題

(8) 図書館教育カリキュラム作成上の問題

(9) 特別教育活動との連繫上の問題

(10) 図書館関係職員の研修と協議組織の必要等々の問題点を見出すことができよう。

高専における現行教育課程は、科学技術の進展と社会・経済的諸条件の変容に伴い、早晚、その改訂が予想されるところであるが、将来の改訂を予見しつつ、そのなかで、高専図書館活動の実態を、現行教育課程の弾力的運用の立場から把握しようとする試みは、十分意義あるものと思量する。

本調査は、以上の観点から、「技術科学教育の基礎としての図書館のあり方についての研究」の一環として、実施したものである。

A 調査の目的

さきに、国専協教育課程等委員会が実施した「教育課程実態調査」(4)並びに「授業科目、時間数等に関する研究」(5)及び昭和47・48年度高専教研集会図書館教育部門における成果を基礎としつつ、教育課程、学習指導及び図書館(室)の管理、運営等との関連において、図書館(室)利用上の問題点を明らかにし、その効果的利用方法を考究するとともに、Technical Collegeの図書館(室)としての望ましいあり方を把握するための資とするにある。

B 調査対象と方法

国立高等専門学校(工業高専校 44校、商船高専校

5校)に対し、昭和48年10月末現在の実状について、昭和48年12月、質問紙法による悉皆調査を実施した。

回答校は、工業高専は40校(回答率90%)で、その内訳は、45年度図書館開館校(6)、46年度開館校(9)、47年度開館校(10)、48年度開館校(8)、図書館未設校(7)。商船高専は4校(回答率80%)で、そのうち48年度図書館開館校は(1)、図書館未設校は(3)であった。

C 調査項目(大要)

- (a), 蔵書数, 蔵書構成(NDC別)及び蔵書利用率
- (b), 図書館(室)の図書利用状況
- (c), 図書館(室)利用促進上の問題点
 - (1)学習指導上の問題
 - (2)学生自身の側の問題
 - (3)図書館(室)の管理, 運営上の問題
 - (4)図書館(室)の施設々備上の問題
 - (5)図書館(室)の利用促進上, 教育課程との関連での問題
- (d), 図書購入実績(昭和47年度)
 - (1)図書購入割合(文部省, 後援会, 校内予算)
 - (2)校内予算の使途(図書充実費, 教官研究費)
 - (3)図書館(室)備付用図書購入経費の内訳
- (e), 図書館(室)の利用促進のための改善策(要望)
 - (1)学習指導面
 - (2)学生に対する利用促進のための指導
 - (3)図書館(室)の管理, 運営上の改善策
 - (4)施設々備の改善策
 - (5)現行教育課程のあり方と関連する改善策

D 調査の結果

調査結果については、本紀要掲載頁数の制限もあり、今回は、「図書館(室)利用促進上の問題点」を中心とした報告、他は、主として概要を記述するにとどめ、調査集計表等の詳細は後日に譲ることとする。

I 蔵書数及び蔵書構成

1 蔵書数

(1)図書冊数

全体として、各校とも10,000冊以上であるが、当然ながら、開校年次との関係も考えられ、図書館開館年度の早い程、蔵書冊数は多い。図書館既設校(以下、開館校という)にあっては、「20,000冊~30,000冊」が最も多く、全体の32%を占め、次いで「30,000冊~40,000冊」が20%を示している。図書館未設校、(以下、図書室校という)では、「15,000冊~20,000冊」のところが多く、全体として、大体、10,000冊以上から30,000冊未満に集中している。

(2)学術雑誌の種類

昭和51年2月

200種以下のものが最も多いが、開館校では、100程以上から600種未満に集中し、特に、「200種~400種」が41%を占め、「100種~200種」が23%と多い。1,000種以上が1校あり注目される。図書室校は100種前後が多い。

2 蔵書構成(NDC別比率)

(1)工業高専の場合、全体の傾向としては、4、5及び9類が最も高い比率を示しており、6、7類は極めて低い比率である。開館校にあっては、5類が30%前後の比率を占め、次いで、4類が22%、9類が14%の割合である。比率が最も低いのは、6類で、大体6%、7類は約3%を示している。他の「類」は、ほぼ3~5%の比率である。図書室校の構成比率も開館校と殆ど同様の傾向である。

(2)商船高専の場合の構成比率は、開館校、図書室校とも大きな差異はなく、工業高専と大体類似の傾向を示している。

II 図書館(室)の図書利用

1 図書館開館校——図書室当時と比較してどうか

(1)館内閲覧及び館外貸出の増減

(i) 館内閲覧について

(イ) 開館校においては、全体として「増加」したとするものが61%で多く、次いで「減少」が23%となっている。開館年度別にみるならば、「変化なし」とする47年度校の傾向が目立つ。

○「増加」の理由として、「図書館設置の位置がよい」(教室棟に近い。教室棟と学寮と中間にある。),「読書環境の好転及び設備の整備」,「冷暖房の設置」,「図書の集中管理の実施」等の理由がみられる。

○「変化なし」の理由では「量的には変化はないが質的に変化」(別棟になったため長時間利用),「授業の振替えて休講を少くしているので放課後以外は利用が少ない」等である。

○「減少」の理由は、「図書館の位置に問題」(教室棟と別棟になった。教室棟との渡り廊下がない),「学習, 読書意欲の減退」,「図書館利用の時間的余裕がない」,「図書の自費購入者の増加」の理由をあげている。

(ロ) 図書室校については、工業高専では、増減相半ばする傾向にあるが

○「増加」の理由としては、「話題の図書を購入」,「終業時間の短縮」など。

○「減少」の理由は、「開館時間と授業時間と関係」をあげている。

(ii) 館外貸出について

(イ)開館校においては、全体として「増加」したとするものが63%で多く、「減少」したが30%となっている。開館年度別では目立つた傾向はない。

- 「増加」の理由としては、「図書館の位置がよい」、「蔵書数、閲覧機の増加」、「図書館に学生課がある」「図書館本来の機能発揮が可能となった」等。
- 「減少」の理由として、「図書館の位置」、「学習意欲の欠如」等がある。

(ロ)図書室校

工業高専の場合、増減は同率であり、理由も館内閲覧の場合と殆ど同様である。

Ⅲ 図書館の利用を促進するにあたって、現在最も問題と思われる点

1 学習指導上の問題

図書館開館校と図書室校は、図書室校が図書室の狭小さと設置の不備に起因する点を指摘する外は、両者とも殆ど同一内容の意見が多いが、共通する問題点として、「講義方式、教科書中心の授業が大部分」、「図書館の利用に自主性が乏しい」、「教官と図書館との密接な連絡を欠く」、「図書館利用の時間的余裕が不足」、「読書意欲、学習意欲の欠如」、「指定図書制推進のための予算的措置」、「視聴覚教育への理解不十分」、「複本の不備」、「職員不足によるレファレンス業務の不備」等の意見がある。要するに、学校全体として、教授過程のなかに、図書館利用を適切に位置づける利用指導計画の策定が必要であり、他方、図書館利用の時間の確保、授業の充実と深化のための図書、資料の整備など、基本的問題の解決が急務であるとしている。

次に、図書館開館年度別に具体的回答を要約して記述したい。(以下、◎印は、各年度開館校に共通した、同一の或は類似した多くの回答があることを示している。従って重複した意見は省略した。)

(1)45年度開館校

- 授業課目の多様さ、高度さに対する指導方法が未確立。
- 蔵書の種類、冊数が不十分なため高度の課題を指導する場合、不自由。
- ◎教官自体に、一般に図書館利用を授業に組み込もうとする積極性が乏しい。
- 講義方式の授業の増加が図書館利用低下に関係。
- 一般科目関係の図書は、総体的に教養的図書が少なく、専門科目関係では、特定部門に偏重している。
- 一般教科の教科書掲載の参考文献がないため、学習展開に問題。
- 非常勤講師担当科目の放課後での図書利用学習に難

点。

- テーマ学習の場合、図書購入方法に問題。
- ドキュメンテーション用の部屋がない。

(2)46年度開館校

- 講義中心、教科書中心的な授業内容、方法では、学生は受身の授業、従って、授業に関連した、図書館の図書を利用して自主的学習を促進するような授業方法が必要。そのため、図書の充実、整備、指定図書制或はそれに準ずる方法を考慮。
- 授業内容と有機的関連をもった蔵書構成、蔵書数が必要。
- 授業時間多く、図書館利用の時間が僅か。
- ◎授業に関連ある読書指導、図書利用指導のための図書(複本)の不備
- 図書館利用のための時間的余裕、授業充実のための図書、資料の整備などの基本的問題の解決。
- 教授過程と関連ある適切な図書館の図書利用のための指導計画が確立されていない。
- 基礎的事項を理解させるためには、教科書の説明や実験で十分で、必ずしも図書館を必要としないとする一般的傾向があり、基礎的事項を理解させることで精一杯。
- 人文、社会科学、芸術関係の図書不足
- 授業に直接関係ある図書数と、一般教養図書の不均衡。
- ◎指定図書制実施のための予算的制約。
- 実験、実習、卒研との関連で図書館利用方法の指導に計画性と学校(学科)としての基本的方針を欠く。
- 教育工学に基礎を置く教育方法、特に、視聴覚機器の利用に関する認識が乏しい。
- 高専の教授網目でない学問分野の教養図書が少ない。
- ◎課題提出方式による自主的勉学方法については、その教育的効果と教師の指導上の負担から考えて問題がある。
- 予算的制約から、読書意欲をそそるような図書を購入できない。
- 図書館利用規程、心得等、図書館利用指導が不十分。
- ◎職員不足のため、レファレンスサービスが困難。
- 長期休暇中の図書館利用は、寮生、下宿者が多く困難。
- (3)47年度開館校
- 図書館利用を前提とした授業を行うには図書費不十分。
- 専門教科の授業内容の高度化に伴い、図書館利用の自学自習の機会は減少する傾向にある。
- 講義方式の授業が精一杯で、演習を加味し図書館を利

用しての授業は困難。

- プロジェクト（研究）方式の授業を特定の教科に採用したいが、授業時間数と学生の余裕時間の不足、授業に関連の同一図書の冊数が不十分等の問題がある。
- 読書習慣をつける必要があるが、図書館利用の時間的制約があって難しい。
- 授業に関連した図書を必読するような指導が必ずしも実施されていない。
- 自主的な学習態度に個人差が大きい。
- ◎視聴覚教育用の資料、機材の不備。

(4)48年度開館校

- ◎講義、教科書中心の授業で、図書館の図書利用を積極的に授業に組み込もうとする意欲、計画性に欠ける。
- ◎授業時間数、科目が多く、教科書の理解に追われ、落着いて読書する余裕がない。
- 過密カリキュラムによるコマ割の授業科目、また、一方通行的な講義、学生の受身の学習態度からは、図書館を積極的に利用しようとする姿勢も時間的余裕も出て来ない。
- 講義、実習、実習を中心とする授業方式が大半であり、選定図書、指定図書制度の実施について関心が薄い。
- ◎視聴覚教育の教育効果についての認識が不十分。
- 学生図書委員会の活発化に対する指導のあり方に問題。
- 館内上履使用が利用上の一つの支障となっている。

(5)図書室校

- ◎授業と図書室との有機的連繋は少なく、図書室利用の基本的方針が確立していない。
- 授業内容をさらに深化せしめるため関連図書の利用指導への配慮が不十分。
- 特定科目への指定図書制度導入にあたっての予算措置。
- 近年、学生の質の低下に伴い、授業内容も程度を下げ、細かく指導するため、教科書中心で参考書等に依存する割合が少なくなった。
- 図書室の構造から、図書室を使用しての講義式の授業、グループ研究、課題学習などの授業形式、視聴覚機器の利用の授業は困難である。
- 視聴覚室がないため授業方法が限定されている。
- 複本備付けは予算上困難。
- 狭隘なため、図書室利用の学習は不可能。
- 職員不足のため十分なサービスができない。
- 図書室利用の時間的余裕に乏しい。

2 学生自身の側にみられる問題点

昭和51年2月

全体として、「自主的学習意欲、読書意欲の欠如」、「図書館利用の習慣に乏しく関心が薄い」、「教科書の理解で精一杯、クラブ活動に追われる」、「図書館利用のための余裕時間が不足」などが目立つが、要するに、「教育課程の過密による時間不足」と「学習意欲の乏しさ」が問題であるとしている。

具体的意見は次のようである。

(1)45年度開館校

- ◎自発的学習意欲が減少し、自学研鑽しようとする心構えの欠如
- 読書意欲特に、堅くて難しいと思われる図書への意欲に乏しい。

- ◎紛失図書増加の傾向が著しい。

(2)46年度開館校

- ◎自主的読書意欲の欠如。
- ◎授業時間の過密、クラブ活動により、図書館利用のための時間的余裕が不足。
- ◎図書館利用の習慣が不十分。
- ◎図書、資料に対する知識及び図書の検索知識の不足。
- ◎趣味的読書として文学的なもの、軽い読みもの、雑誌類への関心は示すが、教科書の勉強で精一杯。それ以外の知識は現時点では不安という態度。
- ◎終業時間を繰り上げる時間割を編成したが利用者は増加しない。

(3)47年度開館校

- 読書よりもスポーツ、娯楽に熱中する傾向。
- 図書館利用する者が固定化している。
- 自費購入の学生が増加。
- 図書館備付けの専門書が不十分なので、教官研究室の図書を借りの方が、指導も受けられるため、図書館を利用しない傾向がある。
- 読むべき図書が何かがわからぬため、結局、読まない。
- 図書館の借出し手続きを面倒がる。

(4)48年度開館校

- 長期的展望に立った読書態度がみられない。
- 図書館に親しむ習慣が形成されていない。
- 高度の学術書、専門書が多く、高専生向けの適書が少ない。

(5)図書室校

- 科目数が多いため、その修得に精一杯。教科書以外の図書を読む余裕に乏しい。
- 読書意欲に欠ける。
- 教科書中心の講義方式の授業が多く、学生に参考図書を是非読ませるといった姿勢に欠ける。
- 時間的余裕がなく、思索の時間を持ちたがらぬ傾向が

ある。

- 図書館の利用に慣れていない。
- 教科書の枠を出ることが困難な者が多い。

3 図書館(室)の管理、運営上問題となっている点

共通した問題点としては「職員不足」、「職員の配置、所属に問題」があり、職員の職務意欲に反映し、それが「図書館本来の業務に支障」を来しているが、これは、「学生指導関係業務より、庶務、会計関係業務を、より上位とし比重を置く姿勢」に根ざすところが大いとしている。従って、当面、「運営組織、機構の改善」が必要であり、「一部局として大学と同様、独立した運営」をのぞんでいる。さらに、以上の問題の解決のためにも、各年度校とも「高専図書館設置規準の制定」が急務であるとしている。具体的な見解は次の通りである。

(1)45年度開館校

- ◎職員不足によるリファレンス業務が困難。
 - 自校独自の資料蒐集にまで手が及ばぬ。
- ◎図書室勤務職員は学生課の所属に。
 - 視聴覚室の管理は図書室職員で。
- ◎図書館教育の重要性についての教官の認識が一般的に低く、それが管理、運営のあり方に影響を与えている。
- ◎高専図書館設置基準の早急な制定の必要。
 - 職員の増員配置(リファレンス業務、司書有資格者、視聴覚教育専門担当、夜間開館)。
 - 図書係職員の他部局との人事交流の必要。

(2)46年度開館校

- ◎開架方式拡大は図書の亡失につながり管理上悩み。
 - 時間外開館の実施が問題。
 - ◎図書館は一部局として独立すべきである。
- #### (3)47年度開館校
- ◎学校の管理運営上の問題が図書館にしわよせされている面が多い。(人員、予算)
 - 職員不足で、図書館として新しい企画の実施は困難。
 - 開館時間の延長と職員の勤務時間との問題もあり、人員構成に考慮の余地。
 - 教官研究費により購入の図書の大半は、教官室に保管されているが、利用度の高い図書を図書館に吸収し、効率的な利用を図ることが課題。
 - 図書係職員人事の固定化に伴い、その将来への身分保障の問題。
 - 図書委員会の責任範囲が不明確。

(4)48年度開館校

- 学生会館的要素が取り入れられているが、職員は手薄で、その機能を十分発揮できない。

- ◎教務主事中心に運営されているが、兼務は問題。運営組織として、館長、同補佐、図書館運営委員会の構成が望まれる。

- 人員の面を考慮した上で、図書館の会計事務は独立させることが望ましい。

- ◎図書館職員の研修への配慮

- 研究紀要の発行業務もしているが妥当かどうか。

(5)図書室校

- 図書係職員の不足。(蔵書数、事務量の増大)
- レファレンス業務は困難
- 高専の図書館サービス基準がない。そのため、職員手薄にかかわらず、必要以上に背伸びする傾向がある。
- 図書委員会のあり方に問題。図書館(室)長の配置が必要。
- 学校自体が、図書館の重要性についての認識が不足ではないか。
- 図書館専任の教授が必要。

4 図書館(室)の施設々備上の問題

「書庫の拡張」、「複写設備及び視聴覚機器、教材の充実」さらに、「利用者の利便を考慮して、教室棟との間に渡り廊下(棟)」の建設を強く要望し、「冷暖房への配慮」を期待している。図書室校においては、「狭隘」のため、図書室本来の業務が制限されており、図書館の新設を望んでいる。具体的意見は次のようである。

(1)45年度開館校

- ◎図書館基準面積の拡大、視聴覚教育機器の充実。
 - 建物全体で図書室の利用面積が少ない。
 - 冷暖房設備の作動にあたっての学校自体の配慮。
- ◎複写設備、図書修復設備が不十分。
 - 安全開架に移行のための設備についての配慮。
 - 館長室、床にカーペットが必要。

(2)46年度開館校

- ◎書庫が狭隘で、数年先で満杯。
- ◎冷暖房設備の設置。
 - 軽読書、指定図書、貴重図書、学術雑誌等の特別閲覧室の設置。

(3)47年度開館校

- 視聴覚機器及び教材の充実を、職員構成との関連を考慮して計画。

- ◎書架の不足。

- 特別閲覧室と一般閲覧室との分離。
- 展示用設備の必要。
- 聴覚教育(テープ、シート)のための個室。
- セミナー室が狭隘。

(4)48年度開館校

- ◎積雪寒冷地にも拘らず、教室棟との間に渡り廊下(棟)がないことが、適確に利用率に反映している。(雨天、風雪の日は、利用者激減。)
- 冷暖房設備は、図書館独自の操作が可能とすべきである。
- 夜間利用を可能とするための設備。
- 図書事務室の採光、暖房についての配点。

(5)図書室校

- ◎図書室が狭隘。
 - 図書室が3階にあり不便。
 - 蔵書格納の書架を配置する余地がない。
 - 自習室が別に必要。
 - 個人用キャレルが必要。
 - 読書サークル活動のための施設々備が必要。

5 図書館の利用促進上、現行の教育課程との関連で特に問題となっている点

全体を通じて、大体共通することは、「授業(教官)と図書館との有機的連繫が不十分で、授業での教育効果を必ずしもあげ得ない」。特に、各校の殆どが問題としているのは、「授業科目数が多く、クラブ活動もあり、時間的余裕が少なく」、「工学教育の基礎としての人間形成の面がおろそか」になっており、従って、図書館利用、図書館教育を促進させるためにも、「現行教育課程及び指導要綱の再検討が必要」であるとしている点である。

具体的な見解としては次の通りである。

(1)45年度開館校

- ◎授業時間の過密、課外クラブ活動のため図書館(室)利用の時間的余裕に乏しい。
- ◎図書館利用指導を授業の一環として実施する必要。

(2)46年度開館校

- ◎現行教育課程は過密で、技術教育の基礎としての人間形成の指導が十分でない。図書館利用を促進するためにも、現行教育課程及び指導要綱の再検討がのぞまれる。
 - 一教科あたりの時間数が少なく読書指導を行うほどの時間的余裕がない。
- ◎一般科目は、科目及び授業時間が十分でない。従って、それを補足する基礎的教養図書の充実、資料の整備が必要。
 - 工学専門書は専門学科の研究室に、教養書は図書館にと二分する傾向があり、然も、教養書は極めて少ない。この間の調整と望ましいあり方が問題。

(3)47年度開館校

- 現行の科目、時間数を減少して自主的学習の時間を確保

昭和51年2月

保する必要。

- 現行教育課程全般についての改善をまって検討する点が多い。
- 教官は図書館学習、アフターケアなど労力の面で大変。
- ◎選択科目に対する複本の措置が採用されていないので指導に問題。
- 開館時間の延長、夜間開館に伴う職員の問題。

(4)48年度開館校

- ◎講義、実験、実習に追われ、図書館利用の新しい授業方式を採用するところまで至っていない。
- 情報化時代の技術教育にふさわしい図書、資料の適正な選定。
- 非常勤講師担当教科に関係の図書、資料が少ない。

(5)図書室校

- ◎図書館利用のための時間が限定され、余裕がない。
 - 職員の勤務態様から閲覧時間の延長は困難。
 - 図書室と教官との緊密な連繫を欠き、授業での教育効果を必ずしもあげ得ない。
 - 非常勤講師担当教科の図書、資料が不足し読書指導が十分できない。
 - 教育課程に組み込まれていない学問分野の図書の充実。
 - 指定図書の整備
 - 研究課題についての二次文献、資料の整備。

Ⅳ 図書購入実績(昭和47年度)

1 図書購入総額に対する支出割合

工業高専回答校40校についてみれば、図書購入総額に対する図書購入費(文部省)、後援会補助費及び校内予算によるものの支出比率は、平均して約1:0.2:2.8の割合を示しており、校内予算の支出が目立っている。また、後援会から、図書購入について全く補助を受けないものと、図書購入総額の5%未満の補助を受けるものは、回答校中、その42%で同率を示している。

2 校内予算における図書費の割合

図書購入に支出される校内予算のうち、教官研究費によって賄われる割合が、その70%~100%に達する工専は、回答校中の72%の多きを占めている。残りは、図書充実費(学内拠出)によっている。

3 図書館(室)備付用図書購入費について

その50%~70%を図書購入費(文部省)に依存するところが最も多く、回答校の34%を占め、次いで、図書充実費(学内拠出)によるもの、後援会の補助によるものの順となっている。

要するに、現行の三本建予算による図書購入方法が最

も適切な方策であるか、また、購入図書がその利用上、効率的に保管、管理、運用されているかどうか、さらに、検討を要するところである。

V 図書館（室）の利用をさらに促進するための改善策（或は要望）

1 学習指導面について（授業形態、内容及び方法）

主として授業方式の改善を考慮すべきであるとする意見が多く、「セミナー方式、グループ学習等多角的な授業方式を採用」し、「主体的に図書、資料を探索し、思考し、相互に対議してゆく」ように、「学生の自学自習を推進」する。そのためには、「蔵書数、指定図書の増加、施設々備の改善」が必要であるが、その前提として、「教官の図書館利用についての勉強が肝要」であって、「図書館利用を学習指導の一つの柱として、学校全体の立場で採り上げるような機運をつくるのが先決」であろうとし、また、「過密な現行教育課程の改善」が急務であるとしている。さらに、「図書館専任の教官（司書教官）の配置により、十分な読書指導」を実施したいとする要望もある。

2 学生に対する利用促進のための指導

「広報活動の積極化」を進める意見が共通して多く、「入学時のオリエンテーションの実施指導」、「ドキュメンテーション教育の実施」を促進する。また、「平素の教育活動を通じて図書館教育を促進する」ことによって、「図書館と読書生活に親しませる」。要するに、「図書館利用の習慣を形成」するため、「図書館利用の意欲の喚起が第一」と考えられ、「図書館独自の文化活動を通じてPR」、「授業、特活時間を活用して図書館利用指導」を徹底化しようとする意見がみられる。

3 図書館（室）の管理、運営上の改善策

まず、共通した見解として、「高専図書館設置規準の制定」の要望が圧倒的に多い。次いで、「専門職員の配置と増員及び予算増」、「図書係職員の将来の身分保障と業務上、学生課への配属換え」を訴える意見があり、さらに、「運営機構の一元化」を図り、「司書教官の配置によって図書館の主体的、能動的機構の確立」を期したいとしている。

4 施設々備上の改善策

開館後数年にして、早くも「書庫の増築」を要望する声が増えに始めていることは注目される。また、「教室棟との間の渡り廊下（棟）」が利用促進に確実につながるものとして、その建設を求める意見が、積雪寒冷地区校から共通して出ている。さらに、「冷暖房設備とその実施」が望まれ、「館内に学生を吸引する設備」を考慮すべきであるとし、「視聴覚機器、教材」、「複写設

備の整備」への配慮を求めている。

5 その他の改善策及び現行教育課程のあり方に関連する改善策

「現行の教育課程の過密性、学校の地理的立地条件及び時間的制約等から、図書館の利用促進は困難であり、これは、図書館若しくは学校のみ措置では解決し得ない問題である」としながら、「図書館利用を前提とした授業内容と方法を、学校全体の問題として考える」必要がある、「情報化時代に即応して現行教育課程を再検討し、精選した内容として学生に時間的余裕を持たせ、図書館を積極的に利用し、自主的学習を行う意欲を喚起」したいとしている。また、「現行の三本建予算による購入図書の保管先、管理方法の適正化」を考慮し、図書の有効適切な利用促進を図るよう希望している。さらに、「図書館がさらに積極的に活用されるためには、過密カリキュラム解消の問題を回避しては考えられぬ。現行教育課程に基く以上、図書館利用向上のための良策も、意欲も出て来ない」とする厳しい意見も陳べられている。

結 び

以上、図書館（室）の図書利用促進のための問題点を中心とし、他は、本調査の概要を記述したが、要するに、図書館利用を前提とした授業方式と内容、例えば、セミナー方式、グループ学習等多角的授業方法の採用を、学校全体の問題として考究し、教官と図書館との有機的連繫を促進しつつ、学生の学習意欲を喚起し、自学自習を推進するため、図書、資料等の整備を図ることなどが、当面の課題として提起されよう。また、このことは工学高等教育機関における図書館活動のあり方を追求するうえで、今後とも、さらに継続して研究を要する重要な課題であろうと思料する。

終りに、本調査に御協力を賜った国立工業高専、商船高専の各位に深く謝意を表したい。

註：

(1)本報告は、昭和48年度総合研究(B)として科学研究費を受けた「技術科学教育の基礎として図書館のあり方についての研究」（研究代表者高知高専中村康治校長）の一部門として、「高専教育課程と図書館利用」の課題のもとに実態調査した結果の一部である。

(2)長岡工業高等専門学校長

(3)科学技術白書（昭和48年度）参照

(4)昭和47年3月 国専協教育課程等委員会

(5)昭和48年3月 国専協教育課程等委員会

（昭和49年6月稿）